

書評

F. Bernhard の偉業

Udānavarga にこころ

佐々木現順

ここに記述するのはハンブルグ大学教授ベルンハルト博士の偉業 Udānavarga についてである。記述の前にベルンハルト教授について一言する。彼はゲッチェンゲン大学のワルドシュミット教授の高弟としてゲッチェンゲンで、ベルリン・アカデミー所蔵トルファン・マヌスクリップトの研究に従事していた。彼の梵漢チベット語はもとより専門とするペーリ語・プラクリット語・ウイグル・トハリ語等の知識は天才と思はれる程の博学強記ぶりを示している。特に、我々に不案内であり、而も中央アジア仏教思想研究に不可欠のトハリ語等に通曉していることは羨望の的である。

彼は中央アジア研究というヨーロッパの伝統に根柢を置き、この方面と最も関係深い律典研究を当面の主要研究課題としてゐる。ハンブルグ大学へは一九六六年五月より赴任し、アルストルフ博士に代つて、若くしてインド学主任教授に任ぜられた。教授自身述べているように、「東洋学を中心となりつつあるハンブルグで経済的資料的恩恵を受けて研究を進めうることは至高の幸いである」。彼のみならず、ハンブルグ大学としても、従来の如く、シュプリング及びアルストルフというジャイナ研究の主流を承けて、ここにヨーロッパでは最初の仏教学中心の新しいゼミを構成して従来の伝統を拡張してゆくようになったことは世界学会のために慶賀すべきことであろう。インドに於て占めるジャイナ研究は非常に高く、従つてハンブルグとインドの諸大学との交流は密接なものであり、相互敬服の情で結ばれていた。インド仏教の勢力は必ずしもジャイナに続くものではない。けれども国際的観点から言えば仏教研究が依然として脚光をあびて来ていることはいふまでもない。このことに關しては既に詳しく報告した如くである(佐々木現順「第二六回国際東洋学者会議より歸りて」印度学仏教研究十二・二号昭三九〇。拙論「インドに於ける東洋学研究」大谷学報四五・一・昭四四〇参照)。この点で、ベルンハルト教授のハンブルグ大学東洋学に於ける意味は日本に取つても大きい。幸い、私も同じ大学に在職した關係で彼は私の講義にも出席し、私も彼の講座に出たりして、相互の理解を深めたことは望外の喜びであつた。

こういう關係であるから以下述べることは学問的表面的研究だけでなく、彼自身から直接聞いた研究者としての苦労と希望がその中へ織り混ぜられるかも知れない。

さて、有部により漢訳として伝持されているウダーナヴラガは周知の如く出曜經三十卷、法集要頌經四卷である。これに相当するチベット訳も存する。これら漢訳諸本に偈頌の数、順序等に相違が見られるが、それは既にその原本たる梵文に相違が

あったであろうことは想像に難くない。

次にウダーナブルガの研究の歴史についてであるが、梵文ウダーナブルガが現在のベルンハルト本に由来するまで歐洲学界に長い学者の死闘が続いた。先づ一九〇八年 R. Paschal が梵文テキストの最初の試論を試みたが間もなく彼は世を去り、続いて H. Leiders が殆んど最後まで完成し、ヴルドシュミットに手渡していたが彼も一九四三年その出版を見ずして物故した。大戦と共に多くの労力もむなしく終り、企業を新しくやりなおす必要にせまられた。そこで、ヴルドシュミットの手によってその完業が着手せられた。即ち、その助手として D. Schilling は諸種の写本を整理逐次梵語へ移しかへ、二二—二三三編をとにかくも一時的に仕上げた。その後、ヴルドシュミットはこの難事業を手渡したのがベルンハルト博士であった。ベルンハルトは従来、諸先学によってまだ用いられていない尤大な数に上る写本の梵字化に専心し更に彼のトハーリッシュ語への知識の歩みよりによって新しい分野を拡げていった。例えば *Lituras* が百種にわたる写本の中で五百葉ばかりについて述べているのに対して、ベルンハルトはベルリン資料の二百種の写本の中から七百葉を用い、それを研究対照に総括している。而も、今後ベルリン資料から未知の写本が見出されるということに殆んど期待されないほど写本がベルンハルトの仕事によって網羅されている。

言語学的に言へば、ウダーナブルガの諸種の異本は仏教梵語の多様な言語的諸層を示す唯一の文献である。我々がそれをパーリの法句経、ガンダーリの法句経と比較すればかかる文献

の言語学的展開への意味も容易に理解出来るであろう。

又ウダーナブルガの文献の意味について、著者も述べる如く、それと仏教、ヒンドウー・ジャイナ諸文献及び諸偈との綿密な比較研究は仏教聖典の文献史的分析に多くを寄与することになるであろう。然し、著者は当該のウダーナブルガではそれらとの対照は極めて少数に限って記しているに過ぎない。こうした原典出版を主目的としたものは原典の校訂のみで充分意味の足るものであって、他の経典からの相当文の引用研究と言うことはそれ自体で又、別途の意味を持って原典以外の一巻として取扱はるべきであろう。それにも拘らず、著者は出来る限り多くの相当箇処の指摘を脚註に指示しており、而もそれが単なる著者の恣意に出づるものでないことが示されている。

この相当文引用ということと連関して言へる問題は、原典の上に現れる言語的文法的諸問題である。これについても原典の出版を主目的とする本書には詳論は望むべくもない。それらの諸問題についてはこれに続く第三巻出版がこれに答えることであろう。

なお著者の計画は大きく、この校訂出版三巻の完成後には、更にウダーナブルガ写本全部の原型のままの *Faksimile-Ausgabe* をさへ企劃している。

以上がウダーナブルガの写本整理に於て支払れたドイツ人諸先学の努力の内景の一端であるが、他の諸国によるウダーナブルガ研究資料発見の事情について次のことを追加しておこう。

即ち、ベルリン資料以外に今までに発見せられているものについて言えば、我々は英国のスタイン、ドイツのグリユンウエ

ードル及び仏のペリオ等の探険によるものをあげることが出来る。又、これらの資料を基本として、比較的容易に見ることを得るものとして次の如き諸刊行物がある。それを列挙するに次の如くあらわす。

E. Sieg, W. Siegling: Tocharische Sprachreste I. Bd. 1921; E. Sieg, W. Siegling, W. Thomas: Tocharische Sprachreste B. Heft 2, 1953; A. von Gabain: Türkische Turfan-Texte VIII, ADAW Jg. 1952. Nr. 7, 1954; Poussin: JRAS 1912 355-377; E. Sieg, W. Siegling: BSOS 6, 1931, p. 483-499; S. Lévi: Fragments de textes koutshens, Paris 1933; S. Lévi: JANOV.-Dec. 1910 p. 444-450; B. Pauly: JA CCXLVIII p. 213-258; B. Pauly, JA CCXLIX p. 333-349; N.P. Chakarvarti: I, Udānavarga Sanskrit, Paris 1930; R. Pischel: Die Turfan-Rezensionen des Dharmapada, Sitzungsberichte der Berlin, 1908 pp. 968-ff; Lévi, Documents de l'Asie centrale, I, Apramāda-varga, JA 1912 XX, pp. 203-294, Paris.

これらの諸既刊本は、どれも断簡であって、その全体を校訂出版したものではない。然るにヘルマン・ルトの偉業はこれらの諸本は勿論、最も難解とするベルリン・マヌスクリップトの断簡の整理と校訂事業である。この断簡整理の苦勞は各頁に満ちた膨大な脚註及複註を一見すれば思い半ばはすぎぬ。これには彼は斯界で最初といわれるコンピュータを用いて成功したと語っていた。本書で新しく追加して用いられた未出版の断簡を

挙げれば次の如きものとなる。

663 Fragmente des Skt-Udānavarga, 2 Fragmente einer bilingualen Uv-Handschrift (Skt.-Toch), 4 Fragmente von bilingualen Uv-Handschriften (Skt.-Toch), 6 Blättern einer bilingualen Uv-Handschrift (Skt.-Toch), 4 bilingual Fragmente des Uv. (Skt.-Toch)

これはベルリン・ノカヂー所蔵の筆写本を主としてである (Cf. pp. 11-26)。更に北方トルコのブランマンデー記録された写本の断簡も用いられる。即ち Sorcuq, ming-öy, Qumtura, Kučā, Tunšug, Singim 並びに未知の地方からのブランマンデー文字断簡がそれである (Cf. pp. 28-94)。次に各品の校訂研究に入り、無常品より波羅門品に至る三十三品が厳密な仕方、梵文に還元せられ (pp. 95-510)、続いてブブリオン・ラフナーがのせられるが (pp. 513-531)。特にその中、法句經に關係した文献の網羅といふ点でこの文献の部分 (pp. 515-518) は従来の如何なる研究に於て見られるよりも重要であり、且利益するところが多い。又、最後に附せられた諸學術雜誌の Verzeichnis (pp. 532-532) も裨益する大であるが、その中には一般に入手困難であり而も一般に看過されていたレポートや研究報告書等まで挙げられていることは当該諸研究所との學術的交流を計る上にも便利な資料を提供している。例えば Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap, Oslo; Studia Orientalia edita Societas Orientalis Fennica, Helsinki; Orientalia Suecana, Uppsala 等は北歐諸國の研究機関として、パース研究に資すべき資料を屢々掲載し乍ら看過しがちなものであ

り、又 Göttingische Gelehrte Anzeigen, Göttingen; Literarisches Zentralblatt für Deutschland, Leipzig 等は一般に入手し難い諸報告書である如きである。かかるまれな諸文献が自由に参照せられるということはヨーロッパ学者の特権の如くであり、外国学術雑誌購入の不充分な我々にとっては羨しい限りである。

著者によって集められた老大な資料と断簡の整理記録の仕方はこの種の研究にとつて参考になる点が極めて多い。

その仕方に依れば、先づ梵文ウダーナブルガが整理された形で挙げられる。次に、マヌスクリップト (MS) の項目下で、たとえ一句たりとも出ている凡ゆる写本即ちペリオ聚集のもの外、ベルリン写本及びその他の断簡が註記せられている。次に var. orthogr. の項で綴字上の諸種の読分があげられ、それによつて原典批判の取扱ひ方を指教せんとしてゐる。例えば *ch* を *ç* 或は *s* とする如きである。更に var. lect. の項で上述の純粹な綴字上の変化以外で写本に現れている諸種の読方が挙げられる。これは普通、用いられる仕方であるが、この際、著者は重要な読方だけを註記し、明らかに誤つた読方には言及していない。最後の *parallelen* の項では一般的に梵・巴・プラクリットから選び近似した相応箇所が指示せられる。これらの古典語以外の漢訳をふくむ諸原語との対照の場合、ただ梵テキストに必要と認めたとときのみそれを脚註に入れて説明している。

次に、その一端を記しておこう。それは無常品第十三偈である。上述の諸種の異本を *MS* と *var. lect.* の項目順で挙げ

る。然し、私見によればこの場合、その手順の中で最も重要な資料は *Gandhāri Dhammapada, Jātaka, VI, p. 26 Liders Waldschmidt: Uṛkanon, §252* インリッミンナ B, 3b5 並に大正藏經四卷、七七七b-e-4 の漢訳であつたかと思われる。それによる梵文は次の様に充填せられ完全な形になつて現われた。

yathāpi tantu viate yad yad uktaṃ samupate/
alpam bhavati vātaṃ evaṃ marītyasya jīvitam//13

(下線は筆者追加充填の綴字を示す)

この中、上記の偈中、*va* と *ta* に相当する部分の *va* と *ta* G. Dh. p. X, 13a-b; yatha vi tādhi vikādi ya yed eva odu opadi; Tib. Uv. 1, 11a-b; dper na thags ni brkyan pa la/ spun ni gan dan gan beug pañi; Toch. B3b5; makte ña (re) [t]e paṃs [wo] kos, sarkimpa [w] (ā) pa (a) tra とある諸本があげられる。これは *Jātaka VI, p. 26 (538, 10a-b): yathāpi tantu viate yam yam dev' upavyati* に相当した箇所である。この *va* と *ta* の問題となる *va* はシャータカに出た *yam yam dev' upavyati* である。著者は *Liders Waldschmidt: Uṛkanon §232* を注意し、その *va* 言はれつゝ *va* と *ta* 即ちこれを以て *yad yad evupavyati* の間違ひである *va* とする意見に従つてゐる如くである。序に言へば、*Uṛkanon* では *yam yad* となつてゐる *yad yad* ではない。これは著者の *Uṛkanon* からの誤写か或は誤植である。それは *va* と *ta* はかなり重要な誤等の如く思われる。yam yad か yad yad かといふことについては *Brough* は G. Dh. p. の註に於て

ンダリーの *ya ved* を疑問なしに *yam yad* となし、「Utkarṇon²⁶」で記されたりユードースの意見と同調した結果になっている。然るにベルンハルトはトルコ写本によって *yad yad* と校訂している。而もこれについていづれの著者も何ら註記を与えていない。以上のことをまとめると *yam yam* なる梵文の本文には以上の外意味の上でも又綴字上 *yam yad* と *yam yad* なる三様の在り方が可能となる。これは詳論を望む一つの例であるが、その詳論について我々は著者が企劃している第二巻 Register, Konkordanzen, Synoptische Tabellen (etwa 290 S.) の出版に期待するところが多い。因に前記十三個にあたる法集要頌經の漢文は次の如くである。「如人弹琴琴瑟具足衆妙音 絃断無少声 人命亦如是」(大・四・七七七—4)。*yam yad* と *yad yad* に続いて起る *dev' upaviyati* と *evupaviyati* の問題に関して紙数の制限上、私はこの二語は述べられないが *dev' upaviyati* という誤読から出た欧訳の若干を訂正する為にもベルンハルト博士の本著書の意義は大きい。当該の漢訳は梵文の如く正しく把握していることも認められる。概括して言えばベルンハルト博士の語学的天才とドイツ的体系的的方法論は諸種の異本校訂にあたり、著しい効果を發揮した。彼の文献学的操作の発端は既に Zur Entstehung einer Dharmā²⁷ なる論項の中に見出される。その発芽がこのウダーナブルガの梵文に於て充分に展開された。これだけの仕事が協力者や助手なくしてヒブリオグラフィに至るまで著者独りの手で成し遂げられたと言う。この事は特にドイツ人学者の業績の上に見られる顕著な特色である。更に、本巻に就いて上記の第

二巻並びに第三巻が出されるであろう。第三巻で言語の相違したウダーナブルガに文法学が附加され、更に仏教梵語の言語学的問題が各相応偈の比較研究と並んで取扱われようとする。従って第三巻それ自体仏教の言語学的分野に新しい光と堅実な体系化とを与えるであろう。ベルンハルトは私に「エジャトンの仏教梵学に対しても多くの言うべきことを持っている」と所信の一端を語り、種々の資料を示して証拠がためをしていたから仏教梵語確定に於てエジャトンの業績を更に展開し、それと並んで双壁を築くことになるだろうと大きな期待がかけられている。特に本論は出曜經との対照が望まれる。

(F. Bernhard, Udanavarga, Sanskrittexte aus den Turfanfunden X, Band I, Einleitung. Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie, 537 S. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.)

註

- ① テキスト校訂に用いるコンピュータ²⁸については彼の論文が最も(“Erstellung von Konkordanzen zu Sanskrit-Texten durch elektronische Rechenanlagen,” Linguistics 22, Mouton & Co, 1966, pp.5—23)。
- ② Bernhard, “Zur Entstehung einer Dharmā”, Z D MG, Wiesbaden: Komm. F. Steiner GMBH, Bd 117—1, 1967, pp. 148—168